

を示すものでもある。とりわけ永ノ尾や原田が示したような長期の思想史的变化を、他の文明圏との比較から進めることは、本書所収の現代の多様で複雑な現象との関連を再考するうえで効果的だろう。

個人的には第2部をとりわけ興味深く読んだ。五百部は人類登場以前に肉食は獲得されていたとして、より遡った生物史の中で考える必要性を示す。例えば現生のゴリラでは肉食が観察されないが、チンパンジーは肉食への強い関心を示し(頻度は少ないが)、肉はかなりの高確率で分配されて社会関係が調整されるといふ。また鶴澤によればヒトの肉食の特徴を説明する有力な進化の理論に共通するのが「乾燥した環境に対する適応」だといふ。単純化すれば、熱帯林にいた頃に肉食と分配は獲得されていて、暮らしていた地域の乾燥化への適応から肉食の特徴の原型が形成され、その後の温帯や寒帯への拡散と適応を経て、現在の偏りと多様性に至ると考えられる。大きな不明部分は、この間の新たな動植物資源との出会いと関与から成る、ドメスティケーションの長いプロセスであり、本書では本郷の論文が「肥沃な三日月弧」地域の事例から、1万2000年前頃の定住集落(標高700m程度の山地から平野への移行帯)の形成が重要な契機であったことを示している。人類が営んできた肉食行為の多様化の源を考えるにあたり、改めて「食資源利用」と「拠点形成」の関係の重要性を示している。

参考文献

- 野林厚志 2012「人間はなぜ肉食を行うのかを考える(共同研究:肉食行為の研究(2012-2014))」『民博通信』139:22-3.
—— 2013「肉食の生態学的側面と文化的側面(共同研究:肉食行為の研究(2012-2014))」『民博通信』143:14-5.

シンジルト・奥野克己編
『動物殺しの民族誌』

京都, 昭和堂, 2016年
384頁, 5,800円(+税)

比嘉 理麻*

本書は、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカにおける「動物殺し」の実践が、「人々の生活世界

とどのような関わりを持ってきたか」(p.4)を、実践者の経験に着目しながら記述し、考察する論文集である。ここでの「動物殺し」とは、狩猟、漁撈、屠畜、供犠といった別個の文脈で主題化されてきた家畜や野生動物を殺す行為を包括的に指す語である。動物殺しをめぐる様々な反応や価値づけ、その技法の社会的・文化的多様性を明らかにすることが本書のねらいである。

はじめに、本書全体の問題提起を概観した上で、各章の要約を試みたい。シンジルトは、「序 肉と命をつなぐために」の冒頭で、日本で話題になった絵本『いのちをいただく』を紹介し、私たちの口にする肉と、家畜の「命」が隔てられている現代日本の状況に言及している。日本をはじめとする分業社会において、多くの人々は、家畜の屠殺や解体に触れる機会がなく、動物殺しの実践は日常生活から不可視化され、こうした社会の様式のもとで、動物殺しに対するある種のネガティブな感覚が生まれている。本書は、「動物殺し」という実践にまつわる人間社会の多様な論理の在り方を記述考察する」(p.11)ことで、こうしたネガティブな感覚を相対化し、それが多様な生命観や動物観のひとつに過ぎないという気づきをもたらすものである。

全体の問題提起を受けて、まず第I部「動物殺しの政治学」には、3つの論文が収録されている。第1章「儀礼的屠殺とクセノフォビア——残酷と排除の文化政治学」(花淵馨也)では、フランスを舞台に、家畜の屠殺方法をめぐる評価や価値づけが、肉食という文脈を超えて、屠殺を担う人びとの差別や排除へと至る様子が描かれる。具体的には、家畜を屠殺前に気絶させるか否かをめぐる論争に照準が当てられる。フランスでは、家畜を屠殺前に気絶させることが法律で義務化されているが、イスラム教やユダヤ教の慣習に基づく「儀礼的屠殺」は気絶させない方法であっても、特例として認められてきた。だが、近年、儀礼的屠殺が「残酷」だとして非難されている。その儀礼的屠殺への反対の機運を、動物に対する人道的配慮の高まりといった動物保護思想と、19世紀以降の反ユダヤ主義の系譜に位置づけて、綿密に分析している。

次の第2章「子殺しと棄老——「動物殺し」としての殺人の解釈と理解について」(池田光穂)では、動物殺しにとどまらず、人間まで含む殺し全般の原理的な説明から出発する。近代国家の下では、人殺しは反社会的な行動として、例外や逸脱とみなされる傾向にあるが、池田は、人殺しを単なる突発的なものや一回性のもとのみならず視点を変え、アチェの「社会制度化された行動」(p.58)としての「殺し」を取り上げる。通

*沖縄国際大学 email: rimahiga@gmail.com

常、鋭く対置される「人殺し」と「動物殺し」を、私たちはつい常識的に分けたくなる衝動に駆られるが、その線引きは、そもそも「人間」と「動物」の存在論的区分を自明視する態度に裏打ちされている。近年の人と動物・自然の二元論批判を踏まえ、殺人まで含めて、新たな連続性の下での議論の可能性が示される。

第3章「殺しと男性性——南部エチオピアのボラナ・オロモにおける「殺害者文化複合」(田川玄)も同様に、人間と動物の殺しを1つの枠組みで論じる方向性を探っている。田川は、北東アフリカ諸社会に見られる狩猟から戦争までの殺害行為を総括する「殺害者文化複合(killer complex)」という概念を足がかりに、エチオピアのオロモ系ボラナ社会における家畜の供犠、野生動物の狩猟、嬰兒遺棄、戦いにおける敵の殺害を含む多様な殺害実践の類似性と相互関係性について論じている。従来の「殺害者文化複合」概念は、人間と動物の双方の殺害を含むとしながらも、主に取り上げられるのは、敵の殺害であったとされる。この点を批判し、本章では狩猟や供犠での動物殺しをも積極的に取り上げることで、「殺害者文化複合」概念の民族誌的な洗練が図られる。

次に、第2部「動物殺しの論理学」では、動物殺しの方法を形作っている地域固有の論理が3つのユニークな論文から紹介される。第4章「狩猟と儀礼——動物殺しに見るカナダ先住民カスカの動物観」(山口未花子)では、山口の動物への深い愛と知識に裏打ちされた、透徹した眼差しで、カナダの先住民カスカと動物との、狩猟を通じた関係性が描かれる。我々とはもすれば、「動物」と一括りにして捉えてしまいがちだが、山口は動物と人びとの関係を丁寧に観察することで、動物種ごとに異なる利用法や関係の築き方、殺しに関わる儀礼の多様性があることを記述する。狩猟の成功には、動物を探し当て、仕留める技術的な洗練のみならず、動物との「初源的同一性」の観念に基づく、命を差し出し受け取る、互酬的関係の存在が決定的に重要である。カスカの人びとが「動物種ごとに個性を認め、種ごとに異なる対応をしている」(p.163)様の細やかな記述を通して、人と動物の連続性の観念が具体的な実践を通して示される。

第5章「毒蛇と獲物——先住民エンベラに見る動物殺しの布置」(近藤宏)では、パナマ共和国の先住民エンベラによる2種類の動物殺しの実践を概観している。この章のユニークな点は、動物殺しが、基本的に動物を「食べる」ことをはじめとする、動物の資源利用を目的とするのに対し、本章は、利用しないが殺す実践をも対象とする点にある。具体的に、殺すが食べない動物として挙げられているのは、人間の命を奪うほど

の危険性を持つ毒蛇やジャガーなどである。殺す動機として、それらの動物への恐れが強くなる。人間より強力な動物に遭遇する可能性に満ちた森での生活において、人間が殺しの主体であり続ける保証はどこにもなく、常に殺される客体になりうる危険性を伴う。殺しの主客の反転可能性まで含めて、その都度の殺しの実践を見た時、動物殺しは、殺しの主体客体関係をめぐって繰り広げられる人と動物の間の戦いとして理解できる。動物の側からの応酬、主体奪還を賭けた襲撃に備えねばならない。

第6章「森と楽園——ブラガの森のプランンによる動物殺しの民族誌」(奥野克巳)では、マレーシア・ボルネオ島のプランンの狩猟実践を描いている。プランンの狩猟は、従来、森の中を歩き回る狩猟、待ち伏せ猟といった形で行われてきたが、近年の変化として、熱帯雨林を伐採して造成されるプランテーション開発によって、新たな狩猟の形態が生まれている。大規模な森林伐採は、動物の生息環境を破壊し、獲物の減少を招き、狩猟ができなくなると、読者は想像するだろう。だが、奥野は、プランテーションによって単純に狩猟が衰退するのではなく、むしろプランテーション作物である油ヤシの実を食べに、ヒゲイノシシやヤマアラシが出没するようになる、という新たな狩猟機会と実践をつぶさに記述している。人間による大規模な環境改変ののちに、植えられた油ヤシは、動物たちを魅了し、その動物たちに魅了された人びとが引き寄せられる、という狩猟のダイナミズムが論じられる。

最終パートである第3部「動物殺しの系譜学」では、動物殺しの変化を見据える3つの論文で締め括られる。まず第7章「供犠と供犠論——動物殺しの言説史」(山田仁史)では、壮大な歴史的展望と幅広い地理的視野のもとに、供犠と供犠論の系譜が辿られ、動物を殺し、生き長らえてきた人類の歴史がひもとかれている。そこで供犠の語源を丁寧に解説した上で、19世紀後半以降に始まった供犠論を丹念に検討している。続く第8章「狩猟・漁撈教育と過去回帰——内陸アラスカにおける生業の再活性化運動」(近藤祉秋)は、アラスカで衰退しつつある、狩猟や漁撈の知識や技術を若年層へ教えることを目的とする「文化キャンプ」を対象としている。白人社会との接触以降、食べ物を含め、生活のあらゆる部分で著しい変化が生じる中、北方樹林という過酷な自然環境の中で狩猟と漁撈を通して生き抜いてきた人びとの生き方への自負と、その生き方の消滅への恐れが素地となり、生業の再活性化運動は文化復興運動の様相を呈していく。狩猟や漁撈の知識や技術は、単に食料調達に不可欠なものではなく、そうした生き方を通して獲得された文化的アイデンティ

ティの核を成す。それゆえ、白人社会との接触が長く、著しく変貌を遂げる現代アラスカにおいて、狩猟や漁撈の衰退の危機と結びついた、「生き方の危機」とその抗いが描かれている。

最終章の第9章「優しさと美味しさ——オイラト社会における屠畜の民族誌」(シンジルト)では、モンゴルのオイラト人が採用する3つの屠殺方法を詳細に記述し考察している。オイラト人は、地域によって、3種の屠殺方法(モンゴル式、イスラーム式、チベット式)を採用している。それぞれの屠殺方法は、家畜に対する「優しさ」を基準に評価され、それらは家畜肉の美味しさに直結すると考えられている。昨今、我々の社会で法令化の進む動物福祉や動物愛護の文脈でも、動物への人道的配慮や苦痛の軽減など、動物に対する「優しさ」が論じられるが、肉の味や「美味しさ」と結びつけて論じられることはない。美味しい肉を食べなければ、動物に優しくあれ。そこには、動物との濃密な関係を育み、動物に生かされてきた人びとの「優しさ」を具現する<食べる倫理>が豊かな民族誌的事例とともに示されている。

以上、ここまで各章の内容を概観してきたが、最後に本書の特筆すべき点と私見を述べておきたい。本書全体を通して、その民族誌的事例の豊かさには目を見張るものがある。まずもって、本書の意義は、これまで牧畜研究や狩猟研究、供犠論のように、文脈の違いによって個別に論じられてきた家畜や野生動物の殺害を、包括的に論じる枠組みを構築し、「動物殺し」の民族誌という新たなジャンルを切り拓いた点にある。それにより、動物殺しの多様性(方法、その評価や価値づけの差異、それが埋め込まれた環境や歴史の相違等)を、その変化まで見据えて総体的に捉えることができるようになった。その意味で、本書は紛れもなく、「世界の動物殺しを主題化した日本初の学術書」(p.3)として高く評価できる。本書の各章での、動物殺しの生き生きとした描写は、日本をはじめとする近代分業社会における、過剰なまでの死や殺しの不可視化や忌避を、数ある可能性のひとつとして相対化する力を持っている。とりわけ、動物殺し全般がネガティブに意味づけられ、差別や排除にまで至る傾向にある現代日本にあっては、その相対化の力にはより重要な意義がある。

だが一方で、分業社会の動物殺しと、それに関わる実践者たちの経験が具体的に扱われていない点が個人的に多少残念であった。ひいては、本書全体を通して相対化する対象であるはずの、分業社会の内実が十分に主題化できていない点が気にかかるところである。自ら毎日のように食らう肉と、その命との隔たりを、

絵本やルポルタージュに任せずに、理論と民族誌を通して検討する必要がある。既に十分な先行研究もあるはずである。それらの研究がほぼ全くと言っていいほど議論の俎上に載せられていないどころか、触れられてさえいない[e.g. 桜井・岸編 2001; 桜井・好井編 2003]。それらの研究が看過され、個人的な印象論や体験談から日本の屠殺観や動物殺しのネガティブな評価が漠然と提示されるに終わったことに関してはやはり残念さを拭えない。

少なくとも、日本の動物殺しに対するネガティブな評価は、単に「食卓の向こう側」の多様な世界を見せるだけでは、消えない。そう考えているなら、楽観的すぎる。仮に、日本の動物殺しに対するネガティブな評価を出発点とするなら、単に「食卓の向こう側が見えない」という肉と命の分断だけでなく、例えば、部落差別の問題を素通りすることはできないはずである。殺し全般にネガティブな評価がくだされがちな現代社会にあって、その内側に入り、その中から見える「動物殺しの実践者たちの経験」の民族誌が求められる。

概して、分業社会に棲まう人類学者は、その生活実感から、自社会の現状を直感的に把握できていると思いがちだが、分業社会として等閑視すべきではないだろう。そうであるならば、自分たちの足元の動物殺しの実践に、もう少し記述を割いてもよかったのではないだろうか。日本ひとつ取っても、その内実は地域ごとに多様で、部落差別と結びついた「屠場文化」や、殺生禁断や食肉禁忌の思想が根づかなかった沖縄の屠殺慣行など、地域の歴史的特殊性の上に、大量屠殺を可能とするような、家畜の大量生産体制が築かれている[比嘉 2015]。他方、近年の獣害問題と密接に絡みあった駆除目的の野生動物殺し[丸山 2006]や、ジビエ化など新たな動きが生まれている[大石 2018]。また、ペットの殺処分や、口蹄疫や豚コレラによる家畜の殺処分など、動物殺しの例は身近に無数にある。このような多様性に富んだ分業社会の動物殺しの内実に目を向けた時、日本の動物殺しに対するイメージがネガティブなものだと一概に言えるかまで含めて、丁寧に検証する必要があるだろう。

もちろん、この点を差し引いても、本書の意義と独創性は微塵も曇らない。動物殺しの民族誌という新たなジャンルを切り拓き、人と動物の関係論を先導する事例研究を積み重ねてきた功績はいくら強調してもし過ぎることはない。動物殺しに関心を持つ研究者はもちろんのこと、異文化理解や自然の人類学、人と動物の人類学に興味を持つ幅広い人にぜひ本書を読んで頂きたい。

参考文献

- 大石高典 2018 「野生鳥獣肉の持続的な消費——日本の課題をグローバルにとらえ返す」『農業と経済』84(6): 46-55.
- 桜井厚・岸衛編 2001 『屠場文化——語られなかった世界』創土社.
- 桜井厚・好井裕明編 2003 『差別と環境問題の社会学』新曜社.
- 比嘉理麻 2015 『沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌』京都大学学術出版会.
- 丸山康司 2006 『サルと人間の環境問題——ニホンザルをめぐる自然保護と獣害のはざまから』昭和堂.

内尾太一著

『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』

東京、東京大学出版会、2018年
300頁、3,800円 (+ 税)

山崎 真帆*

東日本大震災により甚大な津波被害を受けた宮城県本吉郡南三陸町。本書は「尊厳」概念を軸に、同地で生きられる復興過程を描出したエスノグラフィである。当初支援者として災害復興の現場にかかわることとなった著者の内尾は、その後地続きに始めた調査と支援の往還のなかで、自らの学問的立場である「公共人類学」と「人間の安全保障」、そして「尊厳」を結び付け、「災害下での人間の生のあり方」へと接近していく。

被災から9年を迎えた南三陸町の沿岸では、復興事業が大詰めを迎えている。人々は低地の従前市街地から高台に移転し、10メートルの盛土の上に整備された新しい市街地には、商店街やスーパーマーケットが展開する。こうしたかさ上げ地に立てば、同町の代表的な慰霊の場である防災対策庁舎の屋上がほぼ目線の高さにあり、高さ8.7メートルの防潮堤や河川堤防を見下ろすこととなる。景観、そして地域それ自体をドラマティックに変容させながら展開するこの復興のダイナミズムは、発災後同地に流入したモノとカネ、そして多くのヒトによって駆動されてきた。支援者であり、調査者でもある著者はそのひとりであり、こうした復興のうねりのなかで以下の問を発し、探求した。

「被災者にとって「尊厳とは何か」、そして震災復興過程において「人類学は何の役に立つか」。

本書は序章と終章を含む全7章で構成される。本書の核となる3つの事例研究は2、3、4章に配置されており、5章の各節において対応する章の考察が深められるなど、読者が容易に議論の全体像をつかむことができる構造になっている。

序章「大規模自然災害と向き合う」では、本書の課題とキーワード、アプローチ、著者の学問的立場等について説明がなされ、本書における議論の枠組みが設定される。まずは、「保護」と「エンパワーメント」を通じて多様な今日の脅威から個人の生存、生活、尊厳を守るための枠組みである「人間の安全保障」が紹介される。災害はそうした脅威のひとつであり、特に東日本大震災は、先進国、途上国を問わず、今日の世界に生きる人々が多様で不安定な状況下に置かれていることを改めて示した。本書の目的は、人々の「尊厳」という観点からこうした状況を具体的に描き出すことにある。次に、著者は人間の安全保障の枠組みにおいて「文化」が「尊厳」の領域に位置づけられた点に注目し、地域文化に根差した概念としての尊厳に対する、人類学的アプローチの有用性を論じる。ここで「支援と調査を行き来するようなフィールドへの関与」を行う著者の学問的立場として、問題解決型の思考に基づく分析と行動を特徴とし、人間の安全保障の理念との親和性も高い「公共人類学」が紹介される。公共人類学には、人類学をめぐる重要な論点——理論と実践の緊張、倫理や権力、自己反省——に関連した批判がついて回るが、内尾は、災害という「介入」が伴う場においてこそ、こうした論点がより深く考察できると論じる。

第1章「津波常習地に生きる人々」では、東日本大震災前後の南三陸町の姿、そして著者と震災のかかわりが記述される。まず、自然や文化、歴史（特に津波災害史）といった様々な観点から町の諸相が概説される。次に、住民の語りを中心に、同町における東日本大震災という脅威、その実態が緊迫感をもって描かれる。最後に、NPO法人「人間の安全保障」フォーラム(HSF)の事務局長、すなわち支援者として災害復興の現場に没入していった著者自身の経験が語られる。

第2章から第4章では、被災者の尊厳にかかわる3つの問題に取り組む。各章は時系列に配置され、各々の後半では、尊厳の危殆に対して被災者自身の手によりローカルな解決策が見出され尊厳が回復する過程が描かれるとともに、その先にある復興の歩みが示される。

第2章「人道支援と痛みなき抑圧」では、支援を人

*一橋大学 email: zakiyamaho@gmail.com